

ユリ食みの

〜ユリハニジツクスティイナイソ〜

赤くて、
やわらかくて。
赤くて、
やわらかい。

赤い花卉に唇を這わす。
唇に、わずかなふくらみが触れる。
そろりと、いくらか同じ場所
に、唇を添え、押し当てる。

花卉はいくらか蠢く。私の唇を拒絶するかのように。けれど、それは恥じらいなのだと知
っている。私は構わず唇を押し付け、そのまま、花卉の付け根へと舌を這わす。

舌先で。

いくらかの熱を感じる。舌先に、
感じるいくつかの熱が、

花卉は身もだえている。

悶えているのを抑えているのは、

私の唇と、舌だ。

離しては、そっと口づけ、

口づけては、

離す、そっと、

舌を這わす。

離しては、口づける。

そうして、

そのようにして、花卉の付け根へと顔をうずめる。

いくつかの花芯が頬に触れる。花芯は雄と雌に分かれており、

花芯同士で交わっていて、私は彼らの行為の邪魔をしたような格好になるのだろうが、彼
らはそんなことは構わないという様子で無遠慮な私を受け入れて、その細い指先を私の唇
やら頬やら鼻の孔やらにあててきた。

花芯の奥へと私は顔をうずめる。花卉が大きくのけ反っている。もう、どうしようもない
のだという風にして、花卉がのけ反っていく。もうどうしようもないのだと、私も思う。ど
うしようもなく、花卉は私を受け入れる——ことを、私は知っている。

雌蕊の柱頭に触れ、花柱に舌先を這わせ、奥の奥にあるふつくらとした子房を探り当てる。

子房は赤く、腫れている。

それは、恥じらっている。

私は子房を舐め上げる。

私の舌に広がる、ふっくらと柔らかな感触に、私はぞっとする、興奮する。私は、興奮をした。

私の鼻の奥にツンとする感覚があった。いや、それは感覚というよりもっと具体的な、物理的な感触で、それは興奮だということを私は知っていた。そう、興奮している。赤い、何かが、私の鼻の奥にこみあげてきている。あるいは、いくらか赤みがかったピンク色の粘性を持つ、何かだ。

子房は興奮して、『みつ』が溢れている。

私は『みつ』に触れる、と、花卉がのけ反る。子房も震えている。

私は『みつ』を吸る。吸る。音を立てて。

その音に鼻の奥がツンと持ち上げられる。花卉が私のことを拒否するように蠢く。蠢きながら私を逃さず巻き付いてくる。

私は抑え込まれ、花卉に押さえつけられ、子房から顔を話すことさえできず、私の鼻と口に『みつ』が流れ込んでくる。

かぐわしいにおいのみつがながれこんでくる。

花芯が私の手足の自由を奪い、雌蕊が交わり、雄蕊も混ざり合う。

私は体の自由を奪われて、柱頭の先が私の股座を愛撫する。

私は身を任せる。

私の視界は赤い花卉で赤になっている。

赤になっている視界に赤い花卉が折り重なっている。

私は私の唇に触れる子房の柔らかさを堪能しながら、

『みつ』を吸る。

一心不乱に、

私の『みつ』も吸られている。

私と花卉は一体になっている。

いつこの花になっている。

私の中に入る『みつ』は、花の『みつ』で、

花の『みつ』が私の『みつ』だと、

回る、回る、雌雄の花芯がまぐわう、

まぐわいの最中に私がいる、

私は、

吸う、

舐める、

吸る、

入れる、

中に、

入って、出して、
溢れる、

私の唇の端から、
こぼれる

『みつ』が、
溢れて、こぼれて、

雌の花芯がそれを舐め取り、
雄の花芯がそれを舐め取り、

私の唇をこじ開けて、『みつ』が流れ込んできて、滴ってきて、
私の股の間の、うずく、

モノに、花卉が重なり合って、
花卉の唇も、

私の『みつ』を吸っている。
私と、

この美しい花が、
互いに絶頂に達しようとする、
ことを行っていた。

震える。小刻みに、花は何度も震える。

私の舌が、子房を舐め上げるたびに、時折、歯を立てるたびに。
互いの体をまさぐり合って、愛撫を重ねて、
ねて、

寝ていて、
手探りで、
だから、

しかし、愛などなく、
百合に捧げる愛など持たない。

私はただ、この百合を食みたいだけなのだ。
食んで甘噛み、

みつを吸い、
私の愛を欲しいと思うこの百合を吸い尽くしたい。
この花は私をワタシのものだと思いたいのだろう。
ともすれば、もう、思っているのだ。

しかし、残念ながら、誰にでも股を開く女に興味などない。女は花だ。であるなら、私も花だ。女であるから。しかし、私は女であって花でもあるが、花を愛さない。私は、このみつが好きなのだ。このみつが吸いたいのだ。
そして、そのみつを吸うには――

「!!!!!!!!!!」

花卉が見悶えて何か絶叫を発した。
私の首元を花卉が締め上げる。

視界が端からどんどん狭まっていく、白くなる、白くなる。
視界が狭まって、いく。
が、

意識を失いそう――

すんでのところで、花卉が力なくぐったりとした。

「・・・・・・・・・・」

私は、無造作に、花卉から顔を上げた。プールから顔を上げるみたいに。
口元に『みつ』がついている。滴っている。口だけでなく、顔中がべたつく。

それを適当に拭う。部屋全体が赤い照明で照らされているため、何色か判別できない。黒ずんだ液体が、私の手の甲に付いている。

私はそれを舐めとる。『花』の『みつ』を舐めとる。

ふと、違和感。

私は自分の股の間に指を入れた。

・・・濡れてる。

「・・・・・・・・へえ」

久しぶりに良かった。

多分、首を絞められたのが良かった。そうだ。苦しくて死ぬかと思った。
あれはよかった。

――また、誰かにやつてもらいたい、なあ。

くふりと、笑う。

『花』は、私のベッドの上で横たわっていた。
ショートカットの綺麗な顔が何も映らない視線を宙に投げ出していた。
首元に黒ずんだ何かが付いている。それなりに、たくさん付いている。

ショートカットの綺麗な顔を持った綺麗な裸体が黒ずんだ液体に包まれていく。ベッドのシャツがジワリと黒ずんで、陰陽の美しい模様のように完璧な白と黒の配分を作っている。

私は『花』の裸体を跨いで立っている。私の股の下に綺麗な「おへそ」があって、ぐっと身をかがめて、可愛い「おへそ」の中へと舌を這わす。

・・・しょっぱい。

舌先の塩気を唇の先で拭って、綺麗な『花』のまだ温もりの残る唇に目を開いたままでキスをする。

何も映っていない『花』の目と、合った。

鼻の奥に赤黒いものが込み上げた。

2

「がんばーい!!」

と、幾分静かな店内に可愛い嬌声上がる。

うつすらとした赤い照明。もう少しピンクにしたかったのだが、あまりのも怪しい雰囲気になり過ぎるのでやめた。どのみち、うつすらとした赤い照明というのも、どこか控えめで嘘くさくて、それはそれで怪しい雰囲気演出しているのだが。

バーカウンターから離れたテーブル席に三人の女の子たちが、グラスを交わしている。ショートカット、ボブ、セミロング。三人とも一様に真新しいリクルートスーツに身を包んでいる。

そういえば四月だ。こんな店で働いていると、季節感などないようなもので、店にやってくる客の種類やら服装やらで一年という時間の流れを体感している。

春にはおろしたてのスーツ、夏はキャミソール、秋にはコートにローライズ、冬は厚手のセーター。

夏のキャミソールと、秋のローライズがいい。あれは、いい。あの、ボブの子はとても似合うだろう。キャミソールは水色で、ローライズは茶色の落ち着いた――

「ちょっと、」

「え？」

「顔」

カウンターのIがビールを飲み下しながら、私を見ている。もうすぐ飲み切るようだ。

「ああ、おかわりいる？」

「じゃなくて」

「なくて？」

「やらしい。目が」

「だって・・・まあ、春だから、そりゃあ、下心ぐらい芽吹くでしょ」

Iは常連で、友達だ。休みの日に飲んで、一晩明かすぐらいには仲がいい。Iは別段、特別な見た目ではない。日本人らしい、普通の顔立ちで、いくらか面長で、彫りは甘くて、瞼は二重だけれど、目はぼつちりとはしてなくて、鼻はぼてつとしていて、大きくも小さくもない唇と、口元にそそとある黒子が可愛いと思う。あと、ロングの髪は黒くて、グツとくるものがある。

性格も悪くない。悪くないんだよなあ。

「そういう顔で見るな」

「うん、こういう顔なのは知ってるでしょ」

「違う、ワンナイトしたいですって書いてある顔で見ると言ってるの」

「過ごしてくれる？」

「くれない」

「あ、そう」

空のグラスを下げ、代わりのビールを差し出す。

Iは一口分のビールを飲み下し、小皿のピーナッツを口にした。

カキッ、

と、安っぽい音を立てて、一粒のピーナッツがIの歯に噛み砕かれる。カウンターに置かれたデジタル時計の表示が2時に変わった。

今日は平日だった。確か。

曜日はわからない。酒場での曜日感覚など、週末かそれ以外かの感覚程度しかない。前の週末が2、3日前だったからおそらく今日は水曜か、木曜のはずだ。

ずっと薄暗い照明のこの店の中にと、世の中から隔絶された気分になる。

——というか、実際、隔絶されている。

寝起きもこの店だ。スタッフルームをベッドルーム兼用に改装してから、表に出るのが億劫で仕方ない。日の光を浴びていないとなにがしかの病気になるらしいが、幸い、まだその兆候は出ていない。二日酔いにもならない。すこぶる健康である。

『寝起きも、この店。』

という言い方はいくらか表現が柔らかいかもしれない。

この店で生活をする。食べる時も、寝る時も、何もかも。

この店で働き、この店で生きている。薄暗い赤い照明の中、テーブルがへつ、カウンターを含め座席の数も30席程度の、大して広くもない空間が私の全部だ。

ネットは繋いでいない。テレビも、ラジオもない。もちろん、スマホも、ケータイも。外部との交流手段はこの店にやってくる客と、仕入れの業者のみ。

それでいい。それだけでいい。それだけで満足なのだ、私は。

閉鎖された閉塞されたこの店が私の世界で、全部。

ある意味で、この店は私そのものだ。そう、私の中で、あのテーブルの女の子たちは『私の出した飲み物』を飲んで、カウンターのIも、私の――

「顔」

「ん？」

「すごい顔してる」

呆れたような、言葉通りのすごいという言い方で、Iは空のグラスを振っていた。にやけていた。

いや、そりゃあ、にやけるでしょ。だって、

「いやあ、嬉しいなあと、思ってる」

空いたグラスを受け取る。

「何が？」

「だって、みんな私のお酒を飲んでくれている」

「飲んだくれている？」

「・・・そうね、飲んだくれている」

Iへ代わりのビールを差し出す。

ビールは黄色らしいが、この店のビールは、赤い照明が混ざり合って、

いくらか、

黒い。

3

目を、

開けている、

のか、

目を、

閉じている、

のか、

わからない。

わから
ないほどの、

真っ暗

の中に、
いる。

これは、夢か。

夢のように、寝ているのか、
寝ているのか、

のか、

わたしは。

ごとり、

と、

何かが倒れる、

音、
だ。

手首のあたりの

あたりの感覚が湿っている

湿っている感覚を覚えている

覚えている感覚がある

ある感覚がする。

濡れた。

アルコール・・・

┆・・・

・┆┆┆・

・

・
・
・
・
・

┆┆┆・
・

・
・
・

ル。

アルコールの匂いがする。
ビールだ。

淡い、

麦芽の、ふんわりとした、咽るような、

匂い。

重い、と感じた。

感じている、重みはアルコールの匂いのしない方の腕にある。

左？

いや、右だ。

右側に何かが。

のっかっている。

暗い。

黒い、

目を開けているのか、閉じているのか。

眠い、だが、重い。

ああ。

そうか。

突然、明瞭になる。

思考が、明瞭になる。

明瞭になったまま、酩酊していることを悟る。

まだ酔っている。眠っていたのか、それとも酔いで自分を失っていたのか、わからないが。眠気と酔いがきれいに折り重なって、私の脳みその裏側にかそりとこびりついている。

回っているような感覚がある。別段、気分が悪いというものでもない。メリーゴーランドに乗っているようなものだ。ファンタジーな淡い音楽に合わせて、回る回る。白馬はいつまでも回り続ける。ほっぺの赤い、可愛らしいオーバーオールを着た赤いTシャツを着た6歳の男の子を誇らし気に背中に乗せて母親と父親が柵の向こうで白い歯を見せて笑っている。幸せな家庭模様男の子の手にはソフトクリーム男の子の後ろには4歳の妹がいる妹は――

・・・ああ、落とされたのか、私。

首元をさする。

いくらか痛みがある。けど、よかったな。

・・・・・・眠い。

眠いが、思考は明瞭だ。

男の子の持ったソフトクリームが冷たくて美味しそうだなと思えるくらいには明瞭だ。

そして、自分の右側の重みを正しく感じられるくらいには明瞭だ。

首を絞められて、その快感が体中を駆け巡った感覚を覚えているくらいには明瞭だ。

うっすらと部屋の中が見えてくる。

光源は、消し忘れたトイレの明かりだ。部屋の入り口付近のドアの隙間から弱い橙の光。

橙がいつもの天井といつもの壁をいくらか照らしている。私はいつものベッドの上において、私の右半身に「いつも」違う花が乗っている。

今日は誰だったか。

誰を口説いたのか。

誰に首を絞めてくれと言ったのか。

誰を食んだのか。

誰を？

・・・・・・思い出せない。

ボブの子だったか。

シヨートの子か、セミの子か。

セミの子が、蟬の子だったら面白い。ミンミンと鳴く子と事に至るのは面白い。しかし、蟬の子の顔が女の子の顔にくっついていたら――

と、そこまで想像して存外気持ちが悪いくことに気付いた。なんのミュータントだ。

「・・・・ミンミン、ミーンミーン」

ぼつりぼつりと蟬の鳴きまねをしてみる。ふふ。ふふふ。

天井に私のミンミンがそそりと広がる。

蟬と言えば油蟬で、あれはジージー鳴く。夏になると、店に居てもジージー聞こえてくる。けれど、蟬の再現で鳴きまねをする時はなぜかいつもミンミンだ。ミンミンと鳴くのが正しいと感じる。ツクツクホーシは口にするには長すぎる。あれは言うのではなく、耳に聞くのがいいし、頭の中で鳴き声を回す方がきれいだと思う。

ねえ、そう思うでしょ？

「ねえ、そう思うでしょ？」

答えはない。

そりゃあ、ないわな。

誰だっけな。

今日は誰だったか。

ビールの匂いがする。

――私が、ビールの匂いと思っている匂いがする。

部屋中に広がっている。

この匂いが好きだ。アルコールではないのに、アルコールだと思う。

酔っているのではない、これは、倒錯しているのだ。

錯乱していて、

錯綜していて、

倒錯している。

二日酔いになどならない代わりに、私はよくよく錯乱してしまう。桜のように乱れてしまう。錯乱が「桜乱」という字面だったらいいのにと思う。それはとてもいい。桜の匂いがアルコールの匂いのように感じられて、とてもいい。桜を見ながら酔っぱらえるのはとてもいい。まあ、随分と桜も見えていないのだけれど。

ともあれ、私は花の下の私の右側を花の下から引き抜く。

どろぬめり、

と、

びーるのにおいが、

むせかえる。

橙の暗い明かりの中で、何色なのかは判別が出来ないが、どうやら黒い。引き抜いた私の右腕がたつぷりと黒い。

「ミンミン」

蝉が鳴いている。

でも、ボブだった。

私の花はボブの子だった。

可愛いミンミン。セミの子じゃなくて蝉の子。桜の咲く頃、新しい芽吹きの世界に出る子は、迷い込んだ暗いお店の中で、中身を吸われて干からびる。

いや、中身じゃないな。

「みつ」だ。

夏にアスファルトの上でどこにも行きつけずに果てるように。

それは路傍に咲く一輪の花。名も無き花。いやいや、名前はあるでしょ。知らないだけで。

ボブの子の名前は知らない。知らない路傍の花は、いくつものタイヤに蹂躪される。乱暴にされて、可愛そうに、路傍の花。

けれど、私は優しくったでしょう？

横たわる花の子の横顔が見える。

目を見開いて、笑っている。

笑っている口元は真っ黒だ。この子は、どんな花になろうとしたのか。

どんな樹に上りたかったのか。

「・・・そういう、

そういう未来の、落とし穴」

穴に落ちたら何もない。なら、まだいい。

穴の中は気持ちがいいでしょう？

穴の中には気持ちいいがあるでしょう？

穴の中に根が張っているように、舌が這うのはよかったでしょう？

まるで、

穴になったみたいになったでしょう？

花を満たすに高いビルは要らない。

花が咲くのに、毎日ビルに通う必要はない。

ビルは高くても硬くても、ビルはただそれだけで、ただそり立っているだけで、何も無い。花がビルに咲き誇り、ただ散っていくのを見てられない。なら、私が食んであげるのが花でしょう？

「ねえ？」

くふりと、笑みが出た。

私は、花の目を舐めた。

4

かきりと、と、ナッツを砕く音が気持ちよく響いた。

今日は暇な日だ。まあ、大抵の場合、暇な日の方が多いのだが。

カウンターにIがいて、いつものようにビールを傾けている。

「ねえ、」

グラスを置いて、Iが声を掛けてきた。その声が珍しく甘い。気がした。

「なに？」

しまった。いくらか上ずった。嬉しさが出てしまった。

少し咳払いをしてごまかす。

「なんか、臭くない？」

「え？ 私？」

「違う、店」

「衛生面には気を付けておりますが？」

「そう？ 店じゃないのかな・・・」

「じゃあ、私じゃん。私の生活臭じゃん」

「じゃあ、ここで寝起きするの止めたら」

「いやあ、好きなのよ、この店」

「あ、そう」

かきりと、ナッツをIは噛み潰す。

私は彼女に、お代わりのビールを出す。

何色なのかわからない、ビールの匂いが、好きだ。